

蔡瑞月文化基金会董事長・蕭渥廷氏および
ドキュメンタリー『暗暝 é 月光:台湾現代舞踏先駆蔡瑞月』
監督・陳麗貴氏に聴く

楊韜・星野幸代

はじめに：蔡瑞月研究の意義とインタビューに至った経緯

今日、国際舞踊学会（Society of Dance History Scholars）では毎年 Japanese Butoh についての報告が見られ、その源である石井漠も有名である。同様に欧米では、台湾のコンテンポラリー舞踊団 Cloud Gate Dance Theatre への注目度も高い。しかし、後者が石井漠の弟子・蔡瑞月（写真1、1921 台湾台南 -2005 年オーストラリア、ブリズベン）を介して、前者と同じ源流を持つことは知られていない。



写真1 蔡瑞月
蔡瑞月文化基金会所蔵

一方日本では昨今、現代舞踊の原点の見直しが進みつつある¹。これを受けて、愛知芸術文化センターと筆者たちの研究グループ（後述）及び黄英哲愛知大学教授との合同企画により、2014年7月12—13日、蔡瑞月の設立した中華舞踏社（図1参照）関係者を招き、座談会、ダンス・デモンストレーション及び国際シンポジウムの開催が決定している。

ここで本稿の筆者たち研究グループにおける位置づけを説明しておきたい。戦後半世紀を経て、戦時プロパガンダが戦前のバイアスから解かれ、ニュートラルな歴史研究の対象となっている²。この流れを汲み、筆者たちは共同研究「戦時下中国の移動するメディア・プロパガンダ——身体・音・映像の動態的連関から」³を遂行中である。当該共同研究は戦時下中国の演劇・舞踊の巡業及び映画製作・上映、流行音楽など「移

1 近年、日本の舞踊界では現代舞踊の源流をたどる企画が相次いでいる。2009-2014年現代舞踊協会主催による夏期舞踊大学講座「現代舞踊のパイオニアに学び、クリエイションの世界を探る」ワークショップ、2013-2014シーズン新国立劇場「ダンス・アーカイヴ in Japan—未来への扉」等。

2 佐藤卓己「『プロパガンダの世紀』と広報学の射程」、津金沢聡廣・佐藤卓己編『叢書 現代のメディアとジャーナリズム6 広報・広告・プロパガンダ』ミネルヴァ書房、2003、4-8頁。

3 文部科学省科学研究費基盤研究(B)研究課題番号:24320038。研究代表者星野幸代、研究分担者(五十音順、敬称略)晏妮(明治学院大学研究員)、葛西周(東京芸術大学非常勤講師)、邵迎建(徳島大学教授)、西村正男(関西学院大学教授)、楊韜。

動」をキーワードとする芸術活動について、それぞれの専門分野とその間のネットワークの解明を目的としている。そのため、当事者および周辺人物のインタビューは重要なオーラル・ヒストリーであり、研究分担者はオーラル・ヒストリーにより高い成果を挙げている⁴。

次に蔡瑞月と戦時プロパガンダとの関連について極く簡単に説明したい。戦時、日本の舞踊家たちは軍属として大陸や南洋を公演し、自らの身体を宣伝メディアとして五族協和と王道樂土を讃える舞踊を踊った⁵。その際、“日本人”として台湾の舞踊家が参加を余儀なくされていた。本稿で扱う蔡瑞月はその一人なのである。彼女は日本植民下で教育を受け、日本で現代舞踊を学び、日本軍の慰問団に参加した。日本敗戦後は台湾に帰り舞踊研究所を設立したものの、スパイの嫌疑で三年間収監される。1953年に釈放されて以降、台北の「蔡瑞月舞踏芸術研究社（後の中華舞踏社）」を主宰し、最盛期には400人以上の門下生を育て、日本、米国、オーストラリア、韓国、タイ等の舞踊団と盛んに交流した。1983年病氣治療等のため、オーストラリアへ移住。1998年台湾・行政院文化建設委員会の支援で旧作品の復元に取り組み始めた矢先、中華舞踏社が放火されて全焼し、失意の中で指導を続けた。2005年、心臓疾患により84歳で没した。現在、蔡瑞月は台湾現代舞踊の先駆者と評され、台北に彼女の名を冠した記念館が建つ。

先行研究との関連について述べる。上述の通り、蔡瑞月氏は日本の台湾植民化と日中戦争に人生を翻弄された一方、日本の現代舞踊の系譜を継ぎ、台湾でそれを発展させた人物でもある。それにも関わらず、日本での知名度は低く、彼女を対象にした研究も目下のところ皆無といってよい。一方、僅か結婚二年で蔡氏と引き離され、大陸に強制送還された詩人雷石楡（1911 広東 - 1996）⁶については、彼が日本の中央大学に留学し、日本語詩人として大正日本文壇に関わったことから、近年日本での研究は少なくない。⁷ もっともそれらの主眼は文学研究にあり、また雷は大陸中国の妻と添い遂げ、日本時代に関わった女性もいたためか、蔡瑞月への言及はほぼなかった。ここに蔡瑞月関係者へのインタビューを報告することは、戦時メディア・プロパガンダ研究に留まらず広く台湾 - 日本交流史に新たな知見を加え、また比較舞踊学としても重要な第二次資料となると考える。

筆者たちが本稿インタビューに至ったのは以下の経緯による。上記共同研究における軍慰問団資料調査の過程で、筆者たちは蔡瑞月の存在を発見し、彼女が台湾現代舞

4 邵迎建『抗日戦争時期上海話劇人訪談録』台北秀威出版 2011、『当我们年轻时——抗战时期上海话剧人访谈录（口述的话剧史）』北京大学出版社 2013

5 石井漢『皇軍慰問 北支から中支へ』日本教育資料刊行会 1939、宮操子『陸軍省派遣極秘従軍舞踊団』星雲社 1995 等、証言多数。

6 広東の台山中学卒業後、日本の中央大学経済学部留学。中国左翼作家連盟東京支部に所属し、日本語で愛国詩を多く発表した。1940年代には中華全国文芸界抗敵協会で活動。戦後は台湾大学法学部で教鞭をとっていたが、広東に強制送還され、香港、天津等の大学で教えた。

7 桧山久雄『日本語詩人雷石楡のこと』『中国文学の比較文学的研究』汲古書院 1983、北岡正子『雷石楡『沙漠の歌』—中国詩人の日本語詩集—』『日本中国学会報』49、1997、田中益三『日中砂漠下の二人の詩人—小熊秀雄と雷石楡』『野草』64、1999、池澤實芳『浪漫主義詩人・雷石楡の誕生』『商学論叢』76、福島大学経済学会、2007 などがある。

踊界における重鎮となったことを知った。蔡氏はすでに故人であるが、蔡氏の義娘であり門下生であった財団法人蔡瑞月文化基金会董事長[理事長]・蕭渥廷氏と、蔡瑞月氏のドキュメンタリー映画『暗暝 è 月光：台湾現代舞踏先駆蔡瑞月』の監督・陳麗貴氏に、愛知大学・黄英哲教授に紹介の労をとって頂き、生前の蔡瑞月、蔡瑞月の台湾現代舞踊史における位置づけ(図1)等について聞くことができた。

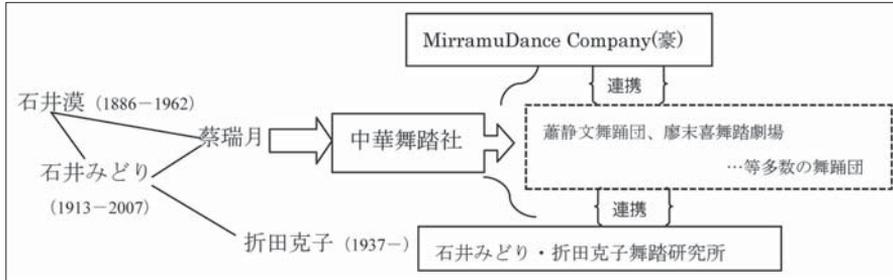


図1 蔡瑞月を軸とした日台比較舞踊関係図 筆者作成

1、陳麗貴監督ドキュメンタリー『暗暝 è 月光：台湾現代舞踏先駆蔡瑞月』⁸ 紹介

蔡瑞月を扱ったドキュメンタリーを撮った陳麗貴監督に対するインタビューに先立ち、当該ドキュメンタリーについて紹介しておきたい。

■シリーズの一環として企画

本作は2003年、台湾の公共テレビ台(Taiwan Public Television Service Foundation)が制作した「世紀女性・台湾風華」ドキュメンタリー・シリーズ(各55分)の第一回である。諸分野で重要な功績のある女性を女性監督が撮るという企画で、舞踊家・蔡瑞月(4月10日)の他、作家、声楽家、伝統劇である歌仔戲の女優、プロデューサー、建築家、伝統民芸の織り手、台湾語の映画スターが選ばれ、それぞれ異なる女性監督が担当している。

なお、以下ドキュメンタリー内の発言は、石井みどり氏のを除き、中国語(北京語)の語りを筆者たちが邦訳したものである。

■作品内容

オープニング：中華舞踏社の焼失

1999年、中華舞踏社は、古跡として保存されることが公的に承認されてわずか二日後放火され、貴重な舞踏の記録、舞台衣装、また「台湾の記憶」とともに焼失した。オープニングは、雨の降りつける焼け跡にビニールシートが張られ、77歳の蔡瑞月が旧作品の復元のため振付に励む姿が始まる。

その後は時系列にそって、蔡瑞月の出生から80歳(2001年)までをたどる。少女時代、雷石楡及び蔡瑞月逮捕の経緯については再現映像を用いている。本作品における蔡瑞

8 「è」は台湾語の音を表記したもので、「～の」を意味する。

月の位置づけは、冒頭の廖末喜（舞踊家）、李昂⁹（作家）の言葉に代表されていよう。

廖末喜：モダンダンス [現代舞] の創作は、林懷民から始まるのではない、蔡先生から始まるのです。

李昂：国民党の方針から、米国から学んでとり入れたのがモダンダンスだ、という見解が普及していると思います。私が思うには、基本的にモダンダンスは蔡瑞月が始めたのです。

ナレーション：蔡瑞月の自述の朗読は、陳麗月監督自身による。

舞踊映像

蔡瑞月自身が踊るレパトリー：

「ジゼル」、「不明 [衣装から「クレオパトラ」か?]」、即興舞踊

1998年以降に再演されたレパトリー。() 内は創作年：

「印度之歌」(1946)、「水社懷古」(1948)、「新建設」(1946)、「牢獄与玫瑰」
「勇士骨」(1953)、「死与少女」(1948)、「傀儡上陣」(1953)¹⁰、「嫦娥奔月」
(1949)

挿入されるインタビュー（順不同）：蔡瑞月、蕭渥廷、石井みどり、李昂（前掲）、彭瑞金（静宜大学台湾文学系教授）、方淑媛、方淑華（姉妹で門下生、いずれも舞踊教師）、廖末喜（門下生、台南に廖末喜舞踏劇場を創設）、林冲¹¹（門下生、映画俳優）、馮青¹²（詩人）、劉峰松（国史館台湾文献館館長）、張金爵（獄中での友人）、陳偉誠（ダンサー）、李曉麗（ダンサー、台湾戯曲学院助理教授）

これらの中で、石井みどりは本編が完成して四年後故人となった。彼女は映像で次のように語っている。

…蔡さんもね、舞台化粧をすると素晴らしいらしいんですよ。それでね、よく地方¹³では、あれ、あんな美人いたかしらって、なあってね、言われて誰かなと思って、わたくし今更ながら考えてみると、蔡さんなんですよ。

蔡さんが、皆さんのご声援を頂きながら、十分に勉強できたり、それだけのものをあの人が得た栄養素っていうのをね、十分に私は発揮できたと思います。あの人がちょうど戦後まで充分お稽古して、向こうに帰って行ってからの蔡さん、すごい活躍しているっていう話を聞いて、私はそれだけ蔡さんがね、本当に立派に、うちで得た色んなものを身につけて、そしてそれを土台に頑張ってくれているということを、私は本当に嬉しく思って、私の大きなダイヤモンドだなんて思って。

9 李昂（1953 -）『殺夫・鹿城故事』（1983。邦訳『夫殺し』藤井省三訳、国書刊行会 1993）をはじめ、フェミニズム\ジェンダーを意識した問題作を発信し続けている。

10 1953年には「木偶出征」と題して上演された。

11 林冲は1960 - 70年代、香港映画のスターであった。主演に『大盜歌王(The Singing Thief)』（1969）がある。

12 馮青（1950 -）、詩集に『天河の水声』（1983）、『快樂或不快樂的魚』（1990）等。蔡瑞月の「傀儡上陣」にインスピレーションを受け詩「傀儡之舞」を発表している。

13 戦時中蔡瑞月とともに慰問して回った各地を指す。

石井みどりが蔡瑞月と踊った証言として遺された唯一の映像であり、非常に貴重である。

このドキュメンタリーで追う蔡瑞月の伝奇的事項のうち、特に重点を置かれているのは次の二点である。

1-1、逮捕、投獄の経緯

1949年当時、雷石楡は香港の大学から招聘されており、蔡瑞月も当地で舞踊を教えるべく渡航の準備をしていた。すると当時住んでいた日本式宿舎へ私服の男たちがやってきて、雷石楡を連れ出し、それきり彼を基隆に拘留する。蔡瑞月は毎日面会に行っていたが、ある日雷石楡は、今から広州に送還される、一緒に行こうという。蔡瑞月は当日息子を連れておらず、また発表会を済ませてから行くかと答え、それが四十年間の別れとなった。李昂はこれについて次のようにコメントしている。

当時こんなナイーブというか無邪気な考え、この期に及んで舞踊発表会を開いてから夫を追うなんて、なぜ蔡瑞月は思い至らなかったのでしょうか、こんなに恐ろしい政治の魔の手が身近に迫っていたのに、一分一秒でもとどまったが最後、永遠に底なしの深淵に陥るかもしれなかったのに。思うに、芸術家ならではの舞踊への愛が余りに深く、世俗的なものすべてを超越していて、利害関係に考えが及ばなかったのでしょうか。

蔡瑞月は同年末、共産党政権下の中国にいる雷石楡と連絡を取ったのではないかという容疑から自宅で逮捕され、三年間収監された。

1-2、『晚霞』演出降板の経緯

『晚霞』は、文化大革命の初期に中国大陸から米国へ逃亡した音楽家・馬思聰（1912 - 1987）の作曲である。馬思聰は大陸で知り合った雷石楡から「台湾に舞踊家の妻がいる」と聞き、蔡瑞月演出、主演は雷大鵬（蔡の長男）ということで、1973年にその舞踊化を委託した。上演へ向けて蔡瑞月は音楽、振り付け、衣装に至るまで舞劇の準備を進めてきた。しかし、この企画が国民党文化工作会より中華民国70周年記念行事に指定されて後、政府側は台湾国立芸術大学舞踏科にこの演出を任せる方針を露わにした。1981年まず蔡の意志とは別に、蔡瑞月が演出から手を引くという新聞報道がされ、続いて国民党文化工作会は蔡瑞月に十万台湾ドルの賠償金とともに演出から手を引くよう要請した。

エンディング

焼失後、2001年再建された中華舞踏社のレッスン場で開かれた記念行事において、周囲を弟子たち、李昂ら文化人たちが見守る中、80歳の蔡瑞月と若いダンサー李曉麗とが即興で踊っている。これが、踊る蔡瑞月を撮った最後の映像となった。

2 インタビュー

蕭渥廷氏と陳麗貴氏へのインタビューは、2013年7月11日蔡瑞月舞踏研究社（写真2、台北市指定古跡「玫瑰(Rose)古蹟」、台北市中山北路二段48巷8・10号）にて、当館所蔵の映像上映と資料閲覧を交えつつ、約二時間中国語（普通話）で行った。日本では蔡瑞月があまり知られていないことを考慮し、時系列ごとに解説を添えつつ、日本語訳したインタビューを編集整理した。なお、インタビュー内容のうち、他の人物に係る部分など、今回公開が不適切だと思われるところは割愛した。



写真2 蔡瑞月舞踏研究社、台北市指定古跡「玫瑰古蹟」2013.7.11 筆者撮影

石井漢門下から石井みどり舞踊団へ

1930年代台南で、女学生だった蔡瑞月は台湾の「宮古座」での石井漢公演を見て、石井漢に師事することを希望する。

蕭渥廷氏（以下「蕭」と表記する）：蔡先生は石井漢氏の住所を知らなかったのので、「日本国 石井漢様」という表書きで、師事したいという手紙を書き送ったそうです。それがきちんと石井漢に届き、石井漢は快諾の返事を寄こしたのです。



写真3 舞踏「豊年祭」石井みどり振付
1943年頃。左から二人目石井みどり、右から二人目、蔡瑞月。
蔡瑞月文化基金会所蔵

東京・自由が丘に舞踊研究所を開いていた石井漢に師事する。しかし間もなく漢が目进行で指導から遠ざかったため、石井漢門下から独立した石井みどりの舞踊団に1941年合流する。1942 - 45年は石井みどり舞踊団とともに、シンガポール、フィリピンなどへ軍隊慰問公演に赴き、日本全国各地では工場などを慰問してまわった。

蕭：(写真3) 踊っているのは全員女性ですね、男性役を演じている人もいます。みどり先生と蔡先生です。当時はあまり男性ダンサーがいませんでしたからね。大部分戦争に取られて、不足していました、だから蔡先生も何度も男性役に扮したことがあります。

蕭：これは（写真4）折田泉氏（バイオリニスト。石井みどりの夫、折田克子の父）が記録していたもので¹⁴、蔡先生が台湾へ戻るときに、日本での舞踏の成果としてもらったもののコピーです。焼失した後にもう一度もらったのです。本当に細かく記録してあります。でもそこに含まれていないものもあるのです。蔡先生とこのノートについて話したとき、北海道で公演したこともあったと聞きましたが、ここには記されていません。



写真4 折田泉氏記録、1942 - 45年日本国内各地慰問公演の記録。
表紙（左）、及びそのうちの1頁（右）。
蔡瑞月文化基金会所蔵

歸台後、台南と台北に研究所を開く。

——台南と台北に研究所を持っていたということですが、指導はどのようにしたのですか。

蕭：行き来をして、留守にする際には、門下生に教えさせていたそうです。

——蔡瑞月氏は舞踊譜を用いていましたか。

蕭：使っていませんでした。すべて自ら踊って見せる、振り写しによっていました。

——蔡瑞月氏の創作方法は、まずテーマがあり音楽を探するという順番ですね。

蕭：そうです。

蔡瑞月が釈放されて以降の1950年代、台湾政府が「民族舞踊推進委員会」を作り、蔡もそこに協力を求められた。その時期の創作は民族舞踊の要素が強い。

陳麗貴氏（以下、「陳」と表記する）：実は小さいころから蔡瑞月について聞いていましたが、民族舞踊家だと思っていました。その頃は、民族舞踊が主流でしたし。北部だったら[蔡瑞月が台北で教えていたので]そうではなかったかもしれませんが、私は比較的南部の出身なので、南部では蔡瑞月はやはり民族舞踊家として知られていたと思います。

——蕭先生は、蔡氏に師事する前に舞踊を学んだことはありましたか。

蕭：いいえ、ありませんでした。大学生になっていましたが、そのときから初めて舞踊を学んだのです。

14 折田泉氏は石井みどり舞踊団の音楽奏者でもあった。当該ノートには、昭和16 - 20年度の石井みどり舞踊団公演について、それぞれ日付、場所、主催、演目及びそれぞれの出演者が克明に記されており、極めて貴重な史料である。

ドキュメンタリー制作への思い

陳:台湾が戒厳令を経て、段々多面的になってきました。私たちが以前には見られなかった資料に触れることが出来、芸術家にしろ文学者にしろ、かつて重視されなかった彼らの作品を観賞できるようになってきました。それで、ああ、実はたくさんの人々が見過ごされてきたのだなと気づいたのです。文学方面では、台湾には実はすぐれた本土作家がいるとしだいにはっきりと分かってきました。全く新しい面を発見したという点で、確かに私と同世代の人間は同じ経験を持っています。

…1990年代以後、台湾では色々な新しい形式の文学や芸術活動が表れてきました。以前とは違った、演劇とか、そして舞踊もです。みな驚かされました。それこそ蕭先生たちが街頭で見せたパフォーマンスとダンスを結びつけて、社会へアピールするような、そんな舞踊は、以前にはありませんでした。1990年代以降、そう、87年に戒厳令が解除されたでしょう、解除後にそういった表現形式が表れ始めたのです。

「我家在空中」(写真5、1994)

1994年10月、台湾市政府は地下鉄を作るために中華舞踏社を接収してうちこわすことを決定した。多くの芸術団体がそれに対する抗議行動に参加した。「我家在空中」はその中でも注目を集めた抗議パフォーマンスで、ダンサー蕭渥廷、詹天甄、徐詩菱が三人掛けリフト状のものに座り、それをクレーンでビル15階の高さに吊り上げ、24時間その状態でいたというものである。



写真5 「我家在空中」写真出典

<http://www.youtube.com/watch?v=NTPzCOSfocl> (2013/7/25 アクセス)

—「我家在空中」の時には音楽を使いましたか。

蕭:ありません。でも昇りはじめの時だけありましたね。

—正味24時間ですか。

蕭:そうです。いろいろな団体が合わせて34に分かれて、いわゆるリレー・パフォーマンスをしました。政府が公式発表で、その日に中華舞踏社を解体すると言っていたのです。ですから解体されないように、それからずっとあくる日の夜まで続

ける必要があったのです。

この近くでたくさんの団体がAからFまでのグループに分かれて、リレー・パフォーマンスをしました。初めてと言えるでしょうね、芸術界があれほど心を一つにして、中華舞踏社を守ったのです。

——（写真5）右側が蕭先生でいらっしゃいますね、雨カッパを着て。

蕭：台風でしたから。独特の感慨がありました。当初、台風が来そうだと聞いてがっかりしたのです。多分パフォーマンスをやり遂げるのが難しいのではないかと思いましたから。それが助けになるとは思いませんでした。みなこの特別な天気には救われました。

——晴れだったら、事態は異なっていたでしょうね。

蕭：すぐに降りてこなければならなかったでしょうね、陽射しが強すぎて。ある医者も言っていましたよ、もしいい天気だったら我慢できなかったね、と。

——こうしてみると、新たな歴史の幕開けのようですね。

陳：台湾の人権は、今は後退しているように思います。

蕭：後退しています。

——一旦非常に先進的な段階まで発展したので、今はそう思えるのでしょうか。

陳：とてもはっきりとそう思いますね。

——芸術界や文化界に影響を与えていますか。

陳：そうかもしれません。何というか、表現する内容にしても、芸術家がだんだんと自己制御しはじめているような…

——比較的安全な範囲に自己検閲してしまっている。

陳：その通りです。

蔡瑞月が歴史の教科書に

蕭：蔡先生が教科書で記述されるようになったのも、やっここ数年のことです。

——台湾の教科書に。

蕭：そうです。私たちの時代には書いてありませんでしたから、そういう人物がいると知らなかったのです。

——どの科目ですか。

蕭：歴史です。

——台湾史の中で蔡瑞月氏に言及するようになったのですね。

蕭：蔡先生だけではなく大勢の重要な人士が、政府が教科書に組み込まないかぎり、埋もれていました。若い人はこういう舞踊家がいることを知らなかったのです。

上記の事実を裏付けるように、当日、中学生のグループが社会見学に来館を訪れ、職員から説明を受けていた。

なお、2014年夏、愛知芸術文化センターは当該蔡瑞月ドキュメンタリー上映とその作品のデモンストレーションを計画中である。

附録 蔡瑞月略年表¹¹

- 1921年 台湾台南府に生まれる。
1937年 台南第二高等学校卒業、日本へ渡り石井漠舞踊専門学校に入門する。
1941年 石井みどりの門下生となる。
1942 - 45年 石井みどり舞踊団の一員として、軍慰問して回る。
1946年 台湾へ戻り、台南に蔡瑞月舞踊芸術研究所を設立。ついで台北にも研究所を開く。台南で初めて個人舞踏発表会を開く。台北の中山堂にも招かれて出演。
1947年 台湾大学中国文学科に招へいされた詩人・雷石楡と結婚する。
1948年 長男雷大鵬誕生。台湾初の原住民を主題にした舞劇『水社懐古』など創作。
1949年 雷石楡が拘留され、広州に追放される。続いて蔡瑞月も拘留され、三年間収監。
1953年 台北に蔡瑞月舞踏芸術研究社設立。(現・中華舞踏社) 現代舞踊創作多数。中華文芸協会舞踏組副主任委員。(～1983)
1960年 日本の東洋舞踊研究者榊原帰逸に招かれ、東京舞踊学校で9か月教える。九段会館で「蔡瑞月舞踊公演」を開催する。
1961年 台湾で初めて「ジゼル」、「コッペリア」上演。
1966年 舞踏社創立二十周年記念公演。
1972年 雷大鵬、オーストラリア・ダンス・シアターに招へいされる。(～1976)
1975年 中韓文化交流光復三十周年のため韓国を訪問し各地で公演。
1981年 1977年から準備を進めていた舞劇『晚霞』の演出から外される。
1983年 雷大鵬とともにオーストラリアへ。
1990年 大陸の保定へ雷石楡を訪ねる。
1994年 台湾地下鉄工事のため、中華舞踏社の取り壊しを言い渡される。蕭静文舞踏団² (Grace Shiao Dance Theatre) を中心に芸術界が「向蔡瑞月致敬(蔡瑞月に敬意を表する)」「1994台北芸術運動」を起こし、中華舞踏社を文化遺産として守る。
2002年 日本で開かれた「石井漠没後四十周年記念」に参加する。
2005年 5月29日 心臓発作のため逝去。



写真5 中華舞踏社のレッスン場で、2013.7.11 舞踏社スタッフ撮影

左より蕭渥廷氏、陳麗貴氏、星野、楊韜。

背景の写真で、星野の頭上に見えるのが蔡瑞月。

謝辞：上述の通り、このたびのインタビューは、愛知大学教授である黄英哲先生の御尽力のおかげで実現いたしました。黄先生に心より感謝いたします。

14 略年表作成に当たっては、前掲『台湾舞踏の先知 蔡瑞月口述歴史』の「附録1蔡瑞月性平年表」及び「蔡瑞月年表」(『啊，她是何等美麗！—蔡瑞月紀念專集』財団法人台北市蔡瑞月文化基金会、2005)を参照した。

15 蔡瑞月門下より蕭静文(団長)、蕭渥廷(芸術監督)姉妹が1983年に設立した現代舞踊団。